

京極読書新聞 <第14号>

発行日 平成22年 7月 1日(木)
京極町生涯学習センター湧学館

「読書記録」の薦め

図書館ボランティア 村山功一

現在中学生である皆さんが、大人になる過程で最も大切な役割を果たすのが読書であることは、常々先生方から指導されていることでしょう。若い時代にしっかりと読書した人とそうでない人とは、その後の生き方に大きな違いが生じる、とさえいわれています。

それでは、ただやみくもに読めばいいのでしょうか。たしかに、“多読”“乱読”もひとつの読書法です。むしろ若い時代こそ乱読すべきだと薦める人もいます。もちろんそれにも一理あります。ただ、残念ながら私たちは“忘れる動物”でもあるのです。読み終えた直後、強烈な感動を得たり、主人公の生き方に強く惹かれたり、あるいは著者の主張に共感を覚えたりしても、時間とともにその鮮烈な記憶は薄れ、やがて忘れ去ってしまいます。要するに、多読・乱読であろうが、寡読・精読であろうが、読みっぱなしでは、せっかくの読書が無駄になってしまうということです。こんなもったいないことはありません。

そこで、「読書記録」(「読書感想文」ではありません)をつけることを薦めます。といってもその方法は、いたって簡単。

- 書名(本の題名を正確に書く)
- 著者、作者名(正確に)
- 出版社名(忘れずに必ず書く)
- 読み始め日付、読み終わり日付(年号も忘れずに)
- 内容・あらすじ
(まだ読んでいない人に紹介するつもりで書く)
- 感想・コメントなど
(できるだけ簡単に、率直に書く。また、感動した言葉、気に入ったフレーズなどもメモしておこう)



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

一冊の本を読み終えるごとに、以上の項目について記録しておくだけでいいのです。書くものはノートでもカードでも何でもいいのですが、書き溜めて蓄積することが大切なので、専用の「読書ノート」を作ると完璧です。

<図-1>は、かつて私がクラスの生徒(高校生)全員に書かせ、提出させた「読書記録カード」の形式です。

<図-2>はその書き方の例です。私のクラスの生徒たちは、この書き溜めたカードを様々な活用しつつ、大学受験を乗り越えていきました。

こんな簡単な記録でも、読書結果を残すことは大切なのです。いまその効果を詳しく述べる余裕はありませんが、とりあえず次の二点、

- ① 国語力がアップする
- ② より良い「読書感想文」が書けるようになる

という効果は、確かです。

皆さんもぜひ実行してみてください。

<図-1>

読書記録		氏名 _____	
◆ 書名	_____	◆ 出版社名	_____
◆ 著者名	_____	◆ 読み始め	月 日
		◆ 読み終わり	月 日
◆ 内容・あらすじ	_____ _____ _____		
◆ 感想・コメント	_____ _____ _____		

<例> 読書記録

◆ 書名	『愛しの座敷わらし』		
◆ 著者名	萩原 浩 ◆ 出版社名	朝日新聞出版	
◆ 読み始め	4月 7日	◆ 読み終わり	4月 18日
◆ 内容・あらすじ	夫の思いつきで、田舎の一軒家に引っ越してきた家族。家族それぞれが、それぞれの思いを抱えて引っ越したため、はじめはイヤイヤだった田舎暮らしが、引っ越し先に住み着いていた座敷わらしとの交流を通して家族の絆を取り戻していく物語。		
◆ 感想・コメント	座敷わらしが、バラバラだった家族を強い絆で結び付ける力になったことが、とてもおもしろかった。現代の人々が忘れてしまっている大切な「心」を、座敷わらしという妖怪が教えてくれる物語は、読んでいて優しい気持ちになった。		

<図-2>

京中生に インタビュー

第2回

平成21年度読書感想文コンクール受賞者
インタビュー第2回。今回はスポーツに関する本を取り上げて3人にお話を伺いました。

稲童丸卓くん(1年生)「前略、がんばっているみんなへ」
山中睦月さん(2年生)「武士道シックスティーン」
柴山璃久くん(3年生)「イチローの脳を科学する」

—— いやー、気がつきませんでした。読書感想文入賞作にスポーツ関係の本をとりあげている人が多かったの、じゃ第2回は「スポーツ」特集で行こうか…と思ったのです。まさか、今回の3人が全員「剣道部」だとは思いませんでした。でも、言われてみれば、北島康介選手の本を選んだりとか、剣道っぽいのかな。

稲童丸 そうですね。個人競技の選手の方が言葉が胸に響きます。

—— イチロー選手というの、ある意味、武士道っぽいし。

柴山 この本を読むと、「(自分にも)似たようなことあったなー」とかよく思うんです。本はあまり読む方ではないのですが、この本は、試合や稽古で自分がやった行動や選んだ判断に、あとから「ああ、あれはこういうことだったのか」というヒントをあたえてくれる特別な本ですね。

—— 山中さんが読書感想文に選んだ「武士道シックスティーン」、おもしろかったですよ。「エイティーン」まで一気に読みました。たぶん山中さんの感想文がなかったら、後回しになっていたと思いますから、感謝感謝です。

山中 いいですね。剣道を続けていると、長い間には、「このまま剣道を続けていてなになるのかなあ?」と考えてしまうこともあるんです。この本は、そんな時に剣道の先生が薦めてくれた本なんです。

—— 稲童丸くんも、そんなことを感想文に書いていましたね。

稲童丸 大会本番で力を充分を出せない時なんか「なんで、こんなに練習しているのにできないんだろう」と落ちこむこととかありますから。

—— 北島選手って、そういう時、バツと印象的な言葉を出しますね。

稲童丸 僕がオッ!と思ったのは、北島選手の「(水泳に限らず)自分が何かに一生懸命に取り組めるのは、まわりに必ず自分を支え、応援してくれる人がいるから」なんだという言葉です。自分が…自分が…と堂々巡りにおちいった発想に、「まわりの人」といううっかり忘れていた視点を教えてくれます。

—— へえ、そうなんだ。その「まわりの人」っていう考え方、「武士道シックスティーン」でも出てきますよ。

山中 ええ、それも、かなり重要場面で。主人公のひとり、磯山香織の剣道観がバージョンアップする、その転回点で飛び出してくる言葉ですね。

—— 香織って、ある意味、言葉の天才ですよ。西荻早苗の剣を「お気楽不動心」って言ってみたり(笑) けっこう的確なんだよな。

山中 生真面目に剣道に取り組む人だからこそ、生まれてくる名言なんでしょうか。勝ち負けにこだわる香織の剣道、勝ち負けにこだわらず自分の価値観でやる早苗の剣道。その、どちらの剣道も好きですね。どちらも自分の中にあると思います。

—— そうでしょうね。

山 中 迷っているときの自分は、自分はどちらの道を選んだ方がいいのだろうか？とか、どちらかの道をあきらめた方がいいのか…とか考えたりしました。でも、「武士道シックスティーン」を読んでからは、どちらの剣も自分の中にあることこそがプラスなんだと思うようになりました。つまり、この二人の剣が「ライバル」として自分の心の中に存在すれば、それがいちばん理想的と思いました。

—— なるほど。それで、感想文のタイトルが「ライバル」になるのね。普通に「武士道シックスティーンを読んだ」とかにしないの、どうしてかな？と思ってました。

山 中 はい。

—— 私ね、柴山さんの読書感想文読んでいて、剣道における「勝ち負け」って、他のスポーツにはない意味があるんじゃないかって思いました。

柴 山 去年の夏の試合のことですか。

—— そう。その前の年、中1の夏に、全道大会予選である強豪選手に負けるんですよ。

柴 山 その試合の時、ぼくはかなり調子が良かったのです。相手は一歳年上だけど、もしかしたら勝てるかも…と思いました。試合は延長戦までもつれこみ、最後の最後、両方が面を打ち合いました。勝ったのは相手でした。

—— その時、「初めてのまともな目標ができた」と書いていますね。

柴 山 その夏までのぼくは、ただ漠然と「強くなりたい」みたいな意識で剣道をやっていたと思うのです。強くなりたいとはいっても、特に誰みたくに強くなりたいといったイメージもありませんでした。だからこそなんですが、中1の時の負けは、ぼくに「強くなる」ための具体的な形を与えてくれたように思います。つまり、あの相手ともう一度戦いたい、勝ちたいという気持ちなんです。

—— うわあ。それって、もろに「武士道シックスティーン」じゃないですか。

山 中 ほんとにそうですね(笑)

柴 山 そうなんですか。ぼくは、イチローの言ってる「ギリギリの目標」理論に似ているなあと思っていました。

—— 柴山さんの感想文、去年の再戦の場面は、読ませますよ。ぜひ、みんなにも読んでほしいから、あえて、ここでは結末を書かないようにしよう。あの相手との再会、試合はどうなったのか…知りたい人は昨年度の「読書感想文コンクール作品集」を読んでください。一冊の本にまとめられて、湧学館にも置いてあります。

京中生に
インタビュー
第2回



「イチローの脳を科学する」 西野仁雄著/幻冬舎
「前略、がんばっているみんなへ」 北島康介著/ベースボール・マガジン社
「武士道シックスティーン」 誉田哲也著/文芸春秋

京極から文学散歩

第3回 くじけない木田金次郎

湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)

前回「カインの末裔」の話をしたら、やはり「生れ出づる悩み」についても書きたくなりました。今年は、「生れ出づる悩み」の登場人物「有島武郎」と「木田金次郎」の二人が出会ってから、ちょうど百年めの年にあたります。岩内町の木田金次郎美術館やニセコ町の有島武郎記念館では数々の記念イベントが予定されていますので、これを機会に行ってみてはどうでしょうか。特に、木田金次郎の絵は、本物を見るにかぎります。カタログや伝記で紹介されている木田の絵は微妙に色合いがちがうのです。それに、本のサイズに収めるためにどうしても絵が小さくなってしまいます。本物の絵からはほとんど遠ざかってしまうのです。

木田金次郎は絵に対して決して妥協をしません。スケッチの場所まで、二里でも三里でも山を歩いてゆきます。ある晩秋の夕暮れ、弟子が川の向こう岸のポプラの下枝をいっかげんに誤魔化して描いていると、突然、木田はジャブジャブと川を渡り、ポプラの一枝をポキリと折って戻ってきました。それを弟子の目の前に突き出して、「君、ポプラの枝ってのはこういう形をしているんだッ」とやる人ですからね。まさに「生れ出づる悩み」に描かれた木田金次郎そのものです。

その木田のガッツを物語るエピソードとして、いちばん有名なのは昭和29年9月の「洞爺丸台風」でしょう。日本海をゆっくりと北上してきた台風15号は、その溜めてきた力を吐き出すように、北海道上陸と同時に牙をむき出します。函館では青函連絡船・洞爺丸を沈め、犠牲者約千二百人という、世界の海難史上タイタニック号やサルタナ号に次ぐ大被害をもたらしました。この台風は威力衰えず、岩内町に入って、死者35人、町の八割を焼き尽くすという岩内大火を引き起こします。

木田の家もあつという間に炎につつまれました。持ち出せたものは、わずかに有島武郎の遺品と制作中の絵十点にすぎませんでした。子どもたちと避難するのが精一杯だったので。この大火で木田はこれまで40年間描きためてきた千五、六百点の絵を一瞬にして失うこととなりました。なんという残酷な運命。

大火の翌朝、取材に来た新聞記者に向かって、油絵具が焼け溶けて固まり、それが朝日に輝くの指さして「あのきれいなを見たまえ」と言ったという逸話も残っていますが、実際には、三日三晩一睡もできず茫然自失状態だったようです。それはそうでしょう。40年間の画業が一瞬ですべて灰になったのですから。この時、木田金次郎、61歳。並の人間なら、そこで人生終わりです。

でも、そうならない。木田は残った力を振り絞って絵の制作を再開します。借金をしてアトリエのついた家を新築します。ここでくじけたら、自分の絵の世界が完全に終わってしまうことを知っていたのでしょうか。必死に絵の制作にしがみつくの。そして、こうも言う。「今後新しい木田金次郎として再出発するが、大火の日から作風に何か変化が起こるのではないかな、そんな気さえする」。これはまた、なんという大胆な言葉なの

でしょうか。木田金次郎の絵には、いつも、どの絵にも、この、自分の運命に真っ向から立ち向かうガッツが溢れており、それが、百年経った今も私たちの心を奮い立たせてくれるのです。



▲ 有島武郎と漁夫画家だった頃の木田金次郎

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

